

「るりちゃん」

中学二年 S・Y

母は絵本作家だった。母の描いた絵本は綺麗だった。綺麗なだけだ。母が描いたものには、魅力、というものはなかった。綺麗で、幻想的なのだが、魅力というものを感じることができなかった。だから、母の本は、何冊かしか読まなかった。つまらなかった、というわけでもないし、不快感が残ったのではない。ただ、魅力がなかったというだけなのだ。

母は、ぼくが二歳のころ病気で亡くなった。まだしゃべり始めて間もないころだった。記憶は、ほぼ薄れている。母の顔も覚えていなかった（今はアルバムを見て少しは思い出したが）。思い出も全くない。

思い出とまではいかないが、唯一、思い出せるのは母が亡くなる三か月ほど前の、あたたかい春の日に、近くの、住宅街の片隅の、きれいな小さな川のそばで遊んだことだ。何故覚えているのだろうか、それがよくわからない。

家族で訪れた、その川は、とてもきれいで澄んでいて、ぼくたちのすむ町が、都会から少し離れた場所だったからだろう、綺麗な透明の川に小さな魚が悠々と泳いでいた。花もたくさん咲いていた。強い日差しが照りつけているわけではなく、ぽかぽかとしていた。川の水は、手をつけるとまだ少し冷たかったが、心地よかった。小さい指と指の間に、水が流れていく。母はにこにこ笑って、ぼくを膝の上に乗せてくれていた。

「夏になったら、川に入れるでしょう。そしたら、またここにきて川遊びができるといいわね」
といて、うれしそうにしていた。

「うんっ」

しかし、それは叶わぬまま母は亡くなってしまったのだ。

それだけだ。別に、思い出がないというのが不幸なわけではないし、母が憎いとかそういうのではないのだけれど、僕の友達や、周りのみんなが自分の母との思い出を話している時や母と喧嘩したなどと話している時に、胸が少し苦しくなるのだ。しかも、相手に悪気はなくとも、そういう話を振られることがある。そして、ぼくが小さいころに母を亡くしていることに気付き、みんな、「ごめんね」と気遣うように、同情するように謝るのだ。それが、たまらなく嫌だった。

中学生になったぼくは、美術部に入った。母も絵本作家で、父も美大卒だったから、ぼくにもそれが引き継がれたのか、絵を描くのは好きだった。「うまいね」「なんでこんな上手に描けるのか教えて！」などと言われるのがうれしかったし、楽しかった。コンクールに絵を出したりすることは一回しかなかったが、その時には金賞をとった。そんな風に、絵を描くのは大好きだったから、中学でも美術部に入った。

中学の美術部でもぼくは才能を開花させていった。進んでコンクールなどにも参加したり、文化祭の展示絵の背景なんかも描いたりしていた。だが、なかなかうまくいかないのだ。うまい絵、といわれるものなどいくらでも描ける。だが納得のいくものが描けないのだ。

魅力を感じない。

それが、母の絵で感じた同じ気持ちと重なって、自分の描いた絵が、線が、水を含ませた絵の具みたいに滲んでいく気がした。ぼくは、納得のいく絵を描きたい。みんなに感動してもらえるような絵を描きたい。母のような絵は、描きたくないんだ。でも、そう思うほど、それから逃げてしまうのだ。

自分の才能に、不満とコンプレックスを抱き始め、胸の内にわだかまりを残したまま日々が過ぎていく。

二年。梅雨明けをしたばかりのある日のこと。ぼくは急に絵を描きたくなくなつて、その日、ぼくは部活を休んだ。どうせ描いても満足しないんだ。そう思つても、部活を休んでしまったのだから、少し悪い気がして、かわりに絵を描く資料集めのつもりで、帰りに散歩をすることにした。散歩がてら、あの場所に行つてみよう。

だんだんと真夏に近づくにつれて日が長くなつていてのを感じた。いつも歩いている通学路をそれて、遠回りする。良い天気だ。あたたかい。まだ夕方の夕日の明るさも昼のような明るさも言えない、妙に落ち着く時間帯。公園ではまだ子供たちが遊んでいるだろう。風はちようどよく吹く。少しだけつよい風が、若葉や花、なつかしい土のにおいを運んでくる。こういう風に表すと、詩人みたいで、恥ずかしいのだが、久しぶりにこんなにしつかりと外の風や景色、においなどを感じたのだ。それをたくさん吸いこめるように、ぼくはあるいていった。

そうして気づけば、あの日、母と来た、唯一の思い出の場所に来ていた。はつきりと、刻まれた変わらない景色。花も昔よりはだいぶ減つたが、草原の中に目立って咲いている。

感嘆とも動揺ともいえないため息が出た。思い出の場所にもう一度来ることができたのだ。

川は、少し階段というよりも、段差のようなものを下がって川岸に行けるようになっていて、その少し上には橋がかかっている。上流のほうなので、氾濫はしないし、流れも強くはない。小川なのだ。

「まったく変わってないんだなあ……」

しばらくその小さな低い橋の上で思い出に浸っていた。

すると、誰かの声がしたのだ。

「やっばりない！」

幼い子の声だ。

声は下からだった。

「ほんとうに、どこにいつちやったの！」

小さな女の子だった。

まっすぐな目の、かわいらしい子だ。小学二年生くらいなのだろうか。きいろい花柄のワンピースを着て、素敵な赤いくつを履いている。その子が、僕の存在に気付いた。そして、あわてたようになつて、そのあとワンピースをぱん、とはらつて、

「わたしね！るりっていうの！」

と、るりちゃん、という女の子は言った。

「るりはね、遠くからきたの！すつごく、まえに、ここに来たの！それで、またすしだけ戻ってきたの！あなたは、むかしここに来たことがあるの？」

と、聞いてきた。(あなたさんとは子供なりの丁寧語のかな？)そのるりちゃんという子に、

「う、うん、ぼくも、小さいころに、ここへ来たんだ、けどもう今はいなくなっちゃったおかあさんと、むかし」

そう答えた。

「やっばり！あなたさん、小さいころここへ来たのね！」

そう話しながら、るりちゃんは段差を上がり、橋の近くにゆっくりあるいてきた。

「そうだよ、ここにきたってというのが、お母さんとの、ゆいいつの、一つだけの思い出なんだ」

思い出、そう言った。

「ふうん、あなたさんは、おかあさんをおぼえてるの？」

「ううん、まえまで、アルバムを見る前は思い出せなかったけど。その思い出と、お母さんの顔だけはおもいだせるんだ」

「それで、あなたさんは、ひとりなの？」

「ううん、おとうさんがいるよ」

「ふうん…」

質問をたくさんしたあとに、るりちゃんは腕をくんだ。

さつき、るりちゃんはなにか失くしてしまった様子だった。

「あの、なにか失くしちやったんじゃ…」

そう聞くまえに、

「ねえ！」

と、るりちゃんのはてのひらをぱちん、とあわせて、

「わたし、少しの間しかここにいないの、それで、久しぶりに来たばかりで…それで、なつかしくって、夢中になって川を見ていたら、ブローチがどこかに落ちてしまったの。川に入ってはいないと思うのだけど…。それに気付かなくて、どこに落ちたのかわからなくなっちゃって…。だから、あなたさんに少しの間だけでもいいから、探すのを、手伝ってほしいの」

あとね、すこしだけ、おはなしあいてになってほしいの、と、るりちゃんは付け加えるみたいに、小声で言った。

るりちゃんという子は、不思議な子だ。ほかの子とはちよつと違う雰囲気がある。すごくいきなりすぎて、驚いたのだが、なんとなく手伝ってあげたいなあ、と思った。

「えっと、今週だけなら平気だよ、今週と言っても、五日間しかないけど…」

「えっと…あしたも大丈夫なの？」

「うん、そうだよ、だいじょうぶ、あしたも」

「なら、あしたも！いつ大丈夫なの？なんじ？」

川の橋の近くの時計を見ると、いまは四時十五分。

「いまは四時をすこしすぎたところだから、三時四十五分くらいからならここへこれるよ」

「えっと：少し前の九のところだから：こんしゅう、ずっと、さんじゅっぷんくらい？！わかったわ、待ってる！」

るりちゃんは、やったあ、と飛び跳ねてにこにこ笑っている。

何にも知らない、どこからきたのかもわからない子と話すというのは、少し不思議で、楽しみだった。

次の日の水曜日。ぼくは三時四十五分過ぎにその川の橋でるりちゃんと会った。変質者に間違われないと良いが：

るりちゃんとぼくは、橋の近くの低い段差を下りて、ブローチを見つけるために草の間や花の下を探し始めた。

「そう、あなたさんに、きいていなかったの、なまえ」
忘れていた、るりちゃんは、ぼくの名前を知らないんだ。

「ぼくは、さがみそうたつていうんだ」
相模颯太。それが僕の名前だ。

「さがみ：そうた、そうたさん？そうたさんはなんねんせい？」
「ぼくは、中二だよ」

「ちゅうがくにねんせいなのね！」
「うん、そうだよ」

ぼくはうなずいた。
「あの、急に話を変えてごめんね、聞きたいことがあるんだけど、

るりちゃんは、どこからきたの？」
「わたし？わたしは、うんと遠いところ！死んじゃった：とかではないけど！ただ、何ていうところだか、わからなくて」

ふふ、とるりちゃんは笑った。きつと地名が読めなかったんだとおもう。すぐまたここから離れてしまおうと言っていたし、転勤族、なのだろう。

「そうそう、あの、話したくなかったらいいのだけど：そうたさんのお母さんは、どんな人だったの？」

「ぼくは、あんまり思い出せないんだけど、やさしくて、にこにこ

「……あと、絵本をかいてたんだ」

「るりちゃんはへえ、と驚いて、」

「そうなの！わたしのお母さんは、そうたさんと同じ、もういないの。それで、お母さんは、私にブローチをくれたの。大切に、大切に、って、いわれたの。けど、けど、それを落としちゃって……なんとか、探さないといけないわ」

と真剣な顔で言った。

「そういえば、おとしちゃったブローチは、どんなものなの？」

「ぼくは、大切なことを聞き忘れてた、とつぶやいた。」

「ブローチは、るりいろなの。私の名前の色なの！ことりさんのかたちをしているの。きんぞくでけっこう重いの」

「へえ、重いなら遠くへ飛ぶ感じではないんだね、ならもしも、川の中に入ってしまっていたとしても、この川はすごく細いし、流れが遅いから、探せばみつかるとよ、あと日が当たると光るから」

「うん！ありがとう、絶対にみつけるわ！」

るりちゃんは、そう言って草をかき分け始めた。

ぼくも一緒にさがした。

そうして必死になって探していると、きづけば四時半になっていた。十五分過ぎていたので、時間が過ぎるのが早くて驚いた。

「ごめんなさい！私が時間をみなかったから、遅くなっちゃった……」

「いいよ、三十分しかないのは短すぎるかなあとおもっていたから。るりちゃんは悪くないよ」

「でも……今日は見つからなかったし……」

「そう簡単に見つからなくても大丈夫だよ？」

「すつごく必死に探し過ぎたんだよね、どっちも、と言って二人で吹き出した。」

子供っぽさがあるのに、大人びているるりちゃんは、とても不思議だ。言葉遣いもそうだが、何かほかに違うものがある。るりちゃんは、「素敵な子」だ。

「じゃあ、また明日だね」

そう別れを告げ、ぼくは家路についた。

木曜日。ぼくは、昨日と同じように放課後に、るりちゃんの待っている川へむかった。あいにく、今週は、木曜日の部活が、休みだったのだ。

昨日より、少し蒸し暑くなってきたのを感じた。

るりちゃんは、ぼくを見つけると明るく笑って、

「今日も、ありがとう！」

と言った。

「ううん、約束したからだよ、頑張ってたさがそう」

そうして昨日のように探し始めた。

「そうたさんは、なにが得意なの？」

とか、

「そうたさんの友達はどうな人なの？」

そんな、友達になったばかりの子と話すときにしそうな、ありきたりな質問を、ブローチを探しながら聞きあったりするのも、結構楽しかった。

「そうたさんの話をして！」

と言われたときに、ぼくはちよつと困ったが、父の話や、美術部のライバルがいるんだ、とか、そのような何の変哲もない自分の周りの人たちの話をした。でも、るりちゃんは、とても楽しそうに聞いてくれた。

「るりちゃんも、ぼくに何か話して！」

といった時（少し無茶なことを言ったかなあ、とおもったが）、るりちゃんは、

「うん、もちろん！これは、お母さんに聞いたお話なの…」

といった。全部覚えてるの、と笑って、ブローチを探す手を止めて、話してくれた。

それは、素敵な詩のような話だった。

「星が見えるでしょう？」

あの星たちはね みんなの素敵な思い出が

たくさん集まってできてるの

たまに その星たちが 思い出のかけらを

うっかり落としてしまうことがあるの

それが 流れ星なの

その星のかけらを あつめて作ったのが

るりちゃんの ブローチ

だから たいせつに たいせつに

そう おかあさんが いいました」

るりちゃんは、言い終わってから、

「私のお母さんはね、そう話してくれたの。それで、あのブローチをくれたの」

るりちゃんは、そういって、嬉しそうに、そして寂しそうに笑った。

「すごく素敵な話だった！」

「そういつてくれると、おかあさんも喜ぶはず！」

そう、大人っぽく、るりちゃんは言って、子供っぽく、笑った。

本当に素敵だった。ぼくは多分、夜空を見れば、そう思ってしまう

うだろう。自分の思い出も、どこかの星のかけらとなってるんだらうか。

結局、今日もブローチは見つからなかった。明日には、見つけよう、と二人で指切りげんまんをした。

金曜日。まだるりちゃんと会ってから四日しかたってないのに、るりちゃんと会うのが日課のように感じた。

こう暫く友人と帰らなくなると、心配されたが、笑いながら大丈夫大丈夫、と言って川へ向かった。

「今日こそ！見つける！」

るりちゃんは大きな声でそう言って、ブローチを探し始めた。

きょうは昨日よりもっと蒸し暑くなった。四時になってもまだじりじりと太陽が肌を焼く。太陽が一度、厚い入道雲に隠れた。風が吹く。

「あ、入道雲だ、入道雲は、雨を運んでくるって、だから今日暗くなってきた頃雨が降るかもしれないね」

そういった時に、タイミングよく太陽が顔を出した。

何かが反射して光った。

「？」

るりちゃんが不思議そうにぼくの顔を見た。

ぼくはその場所にかけていって、草をかき分けた。

綺麗に、鈍く光る、るり色の、ことりのブローチ。

「みつけたよ！これじゃない？」

るりちゃんは、きよんとした顔でこっちを見て、その後、ぱあつと明るい顔になって、

「これだあ……」

と、本当に安心したように言った。

よかった。やっと見つかった。るりちゃんは、そのことりのブローチを僕の手から受け取って、少しついた土をぱつと払って、胸元に、丁寧な、丁寧につけた。

「ほんとに、ほんとに、ありがとう」
るりちゃんは言った。

るりちゃんのブローチを見つけて、ぼくらは会う必要がなくなつた。

「そうたさん、四日も、ありがとう、とつても助かったし、とても楽しかった！」

「うん、よかった」

ぼくは、ほんとはよかった、と笑った。こちらこそ、素敵な話と時間をありがとう、と言いたるところだったが、格好つけてるようで、言うのが恥ずかしくて、言いかけた言葉を引つ込めた。

るりちゃんは言った。

「あのね、言わなかったんだけど、今日、ここから離れるの。わたし、いわないとして思っていたのだけど：どこへ行くかは、わからないけれど：」

そういつて寂しそうに下を向いた。

「：じゃあ、会った印か何か、つけておこうよ、あの石に、なにかのマークとか」

るりちゃんはすごく楽しそうに、

「うんっ！」

と言って、ぼくが筆箱から取り出した油性ペンで、小さく名前を書いた。

『るり そうた また あうひ まで』

「ただいま」

「ああ、おかえり、颯太」

「ん」

るりちゃんと別れを告げ、帰ってくると、やはり雨が降ってきた。

「やっぱり雨かあ：」

ぼくはつぶやいた。

「急に降ってきたなあ」

「うん：あれ、何、それ？」

「ん？これか、お前がまだ読んでない、母さんの絵本と、むかしのアルバムだよ。衣替えのつもりで、クローゼットの整理をしてたら出てきたんだよ。懐かしいな、少し色あせてるけど。読むか？」
と、父は絵本を差し出した。

「母さんな、これを描くために、むかし、あのきれいな川に遊びに行った夜に、もう一度見たいって、ひとりでその川を見に行ったんだ、それを、お前にも見せたかったってなあ：」

お母さんの絵本を、ぼくはあんまり読まなかったし、るりちゃんともお母さんの話をしたから、この機会に、読んでみようかな、と思った。ぼくは、頷いて、その本を手にとった。

『るりちゃん』。それが絵本の題名だった。きいろい花柄のワンピースに、すてきな赤いくつ。

『その女の子のなまえは　るりちゃん』

るりちゃんは　とてもきれいな川のそばで

たくさんあそんでいました

そこは　よるになると

きれいなお星さまが　またたくのです

るりちゃんは おかあさんと よるに

その川へ お星さまを みにいきました

星が見えるでしょう？』

その続きは知っている。

ぼくは絵本を勢いよく閉じて、転がるように家をでた。

「颯太！」

父の声が聞こえた。気にしないで、走りつづける。行かなければ。

雨の中、全力で走る。

「はあっ」

川には誰もいない。

「はあっ」

ぼくは段差を下りる。

川は少し流れがはやくなっているだけだった。大きな石。

「はあっ」

『るり そうた また あうひ まで』

あった。みつけた。嘘じゃなかったんだ。夢じゃなかったんだ。るりちゃんのおかあさんは。

ぼくのおかあさんは。

はじめてお母さんの絵本に魅力を感じた。いや、前から、本当は気付かなかっただけなんだ。ぼくも、お母さんみたいな、絵を。

描きたい。

雨がやんだ。

雲がみるみるうちになくなった。

夜空の星が見えた。

思い出の、かけら。

『星が見えるでしょう？』

あの星たちはね みんなの素敵な思い出が

たくさん集まってできてるの

たまに その星たちが 思い出のかけらを

うっかり落としてしまうことがあるの

それが 流れ星なの

その星のかけらを あつめて作ったのが

るりちゃんの ブローチ

だから たいせつに たいせつに

そう おかあさんが いました 『』